

遁世・数奇・漂泊の系譜

目崎徳衛

芭蕉のうちなる西行



角川選書

212

数奇とは風流を意味し、数奇心とは詩心を意味する。

西行の遁世は、あふれてやまない

詩心に殉じたものと断定する著者は、

王朝の美意識の系譜をとらえ、その上に立つ



芭蕉のうちなる西行

平成三年四月三十日 初版発行

著者 目崎徳衛

©Tokue Mezaki 1991

Printed in Japan



発行者 角川春樹 発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三一 郵便番号一〇〇 振替東京一〇九三〇八
電話 営業〇三三六七八五二 編集〇三三六七八五二

装幀者 杉浦康平 協力 赤崎正一

印刷所 旭印刷株式会社 外装印刷 旭印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

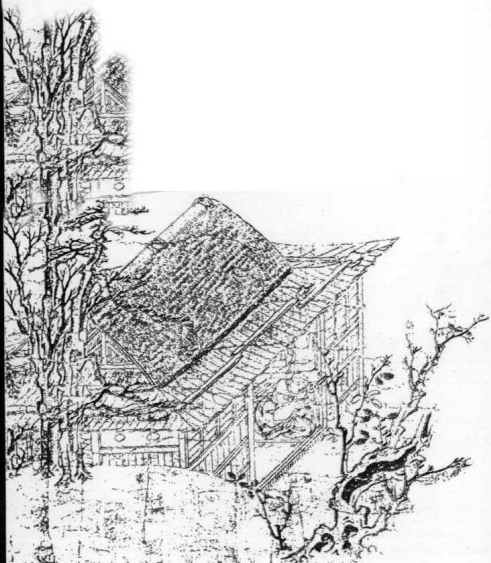
落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-04-703212-3 C0395

目崎徳衛

芭蕉のうちなる西行



角川選書

*

芭蕉のうちなる西行

目崎徳衛

目次

I

芭蕉のうちなる西行——八

芭蕉の挨拶について——三

良寛と越後びと——九

II

わが愛唱の西行歌——六

史上の西行——一〇一

西行伝説と無常観——二四

古典的漂泊と山頭火——二三

遁世の世界——三〇

旅する女たち——三六

III

平安朝の庶民女性——二五

王朝の美意識と人間観——一五

百人一首と王朝美の系譜——一八

後鳥羽院小伝——二〇

あとがき——三九

初出一覧——三一

I

芭蕉のうちなる西行

ご存知のように、芭蕉は木曾義仲が大好きであつた。元禄二年（一六八九）の「奥の細道」の旅では、越前今庄の義仲の城跡と伝える燈山で、

義仲の寢覚の山か月悲し

と詠み、加賀小松の「太田の神社」で木曾義仲が奉納したという実盛の甲を見て、

むざんやな甲の下のきりぎりす

の一句を手向けた。そして、この旅の後、元禄四年には近江義仲寺の木曾塚に草庵を結び、名月の

句会に、

月見する座に美しき顔もなし

と詠み、おそらく翌年もここに月見して、

三井寺の門たたかばや今日の月

の吟をのこした。近江の門人たちの心くばりも快かったのであろうが、義仲寺の風情や木曾殿のイメージがいたく気に入っていたからに違いない。

元禄七年の最後の旅でも、途中この草庵を用い、やがて大坂でなくなった際、遺言によって門弟が遺骸を義仲寺まで運んで木曾殿のかたわらに葬ったのは、天下周知の事実である。

芭蕉は「奥の細道」の旅で、歌枕に心を寄せたのと同じくらい、源平合戦の興亡の跡に興味を向けていた。『平家物語』の英雄木曾を熱愛したのはその当然の帰結だが、さて芭蕉が義仲などよりもはるかに深い敬慕を寄せていた先人西行は、あいにく義仲が大嫌いであった。

そのことは、西行の次の歌から推察される。

木曾と申す武者死に侍りにけりな

木曾人は海のいかりをしづめかねて 死出の山にも入りにけるかな

故安田章生氏（『西行』）はこの歌を、「西行は、源氏、とくに京都を混乱させた義仲に好感を寄せていたとは思われず、この歌は、詞書の書き方にも、一首のひびきにも、ひややかなものが感じられる」と鑑賞された。この鑑賞は正確そのものといえるであろう。私はことし学生たちと九条兼実の日記『玉葉』を読んでいるが、寿永二年（一一八三）七月、義仲の軍勢が都落ちの平家を追って京へ乱入して来た日の混乱は、まさしく去る年の空襲や敗戦の日にでも喩えるほかない有様であった。西行はその頃、どこよりも安穩な伊勢神宮のお膝元にさっさと疎開して、悠々と日を送っていたが、もともと平清盛とは若き日とともに鳥羽院北面に仕えた旧友で、生涯を通じて親交があり、つい三、四年前にも清盛に頼み事をして快諾してもらった仲である。また弟や甥が佐藤氏の本領を守るために平家に従っていたこともあって、まぎれもなく平家びいきであった。のみならず、戦乱に乗じて佐藤氏の所領を奪い取ろうとした某に、どうやら義仲は承認の文書を出してやった事もあるらしく、こうなれば義仲は西行にとって実家の憎つき敵でもある。

ところが、木曾の討死を冷酷に詠ったこの一首は、『聞書集』というものに記されているだけで、西行の家集として芭蕉のころ流布していた『山家集』には入っていない。『聞書集』が伊達家の秘庫から発見されたのは、実に昭和のはじめのことだから、元禄の芭蕉は先人西行の木曾嫌いを知るよしもなかった。げに知らぬが仏である。

——もしや芭蕉がこの事を知っていたとしたら、彼の木曾殿好きはありえたらうか。そういうおかしな想像をして、私は微笑を洩らすことがある。それほどに、西行は芭蕉にとって大切な心の

師であつたのだから。

『笈おいの小文こぶみ』の冒頭に、

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道する物は一なり。

と記された有名すぎる文を引くまでもなく、芭蕉の風雅を培つちかった精神的伝統の核心には西行がいる。『校本芭蕉全集』をたよりに、西行への傾倒のあらわれかたを追ってみると、

佐夜中山さやのなかやまにて

命なりわづかの笠の下涼すずみ

という作が最も古いようである。延宝六年（一六七八）に出た不卜編『江戸広小路』に収められているよしだが、寛文十二年（一六七二）故郷を捨てて江戸へ下った途中の作か、または延宝四年（一六七六）はじめて帰郷した時の作か、私には判断がつかない。いずれにせよ、西行の代表作とされる、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや 命なりけり小夜の中山

の一首は、松江重頼の編んだ『小夜中山集』の表題でも知られるように人口に膾炙かいしやしていたから、歌枕「小夜の中山」への挨拶は格別芭蕉ひとりの手柄でもない。その『小夜中山集』に収められた宗房（芭蕉）の、

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿
姥うば桜さくら さくや老後の思ひ出いで

がいずれも謡曲（鞍馬天狗・実盛）仕立てであり、また今知られる最も古い作、

春やこし年や行きけん小晦こづもり日

が『伊勢物語』を踏まえているように、芭蕉は早くから中世の古典に親しんでいたが、西行への関心はそれらよりもいくらか遅れて、江戸で浪人生活をはじめた頃からということになるうか。

浪人の芭蕉などが貴重な写本を手にして読みふける術はなかったろうが、都合のよいことに西行の家集・伝説のたぐいは、この頃続々と出版されつつあった。家集には二系統あるが、『山家集』は文禄三年（一五九四）に板本の「六家集」（俊成・良経・慈円・定家・家隆それに西行）が出て世に流

布しはじめ、「西行法師家集」(西行上人集)の方も延宝二年(一六七四)に上梓された。晩年の西行に学んでその言行を録した蓮阿の「西行上人談抄」は、寛文九年(一六六九)に出、また西行伝説を伝播させる源となった「西行物語」と「撰集抄」は、前者が正保三年(一六四六)の木板本、後者が寛永ごろの古活字本と慶安ごろの木板本が出てから、見やすくなった。芭蕉にとっては実によいタイミングで、役者はすべて出そろったのだ。この事は蕉風の形成を考える場合に、少なからぬ意味をもつものと思う。

前引「命なり」の句に次いでは、延宝五年に、

津の国の難波の春は夢なれや 芦の枯葉に風渡るなり

という西行歌を踏まえて、

あすは粽難波の枯葉夢なれや

としゃれている。また天和三年(一六八三)の「虚栗」の跋には、「西行の山をたづねて、人の拾はぬ蝕栗なり」ともいう。こうして心中に熟してきた西行敬慕が大爆発を起こしたのは、貞享元年(一六八四)の「野ざらし紀行」の旅である。

例の歌枕「小夜の中山」で、

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

と詠んだのを手はじめに、

暮れて外宮に詣待りけるに、一の華表の陰はの
くらく、御燈処々に見えて、「また上もなき峯
の松風」身にしむ計、ふかき心を起して

みそか月なし千とせの杉を抱あらし
西行谷の麓に流あり、をんなどもの芋洗ふを見
るに

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

という伊勢の吟、

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町
計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有
て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。
彼とくくの清水は昔にかはらずとみえて、今

もとくくと雪落ける

露とくく心みに浮世すゝがばや

という吉野の吟は、この旅そのものが西行追慕を目的として企てられたことを語るがごとき、つよい迫力をもつ。

「みそか月なし」の句の下敷きとなった西行歌は、西行の晩年に奏覧された『千載和歌集』に、

高野の山に住みうかれて後、伊勢の国二見の山
寺に侍りけるに、太神宮の御山をば神路山と申
す、大日如来の御垂迹を思ひてよみ侍りける

円位法師（西行）

ふかくいりて神路の奥を尋ねれば 又うへもなき峯の松風

とみえるもので、晩年に自撰した『御裳濯河歌合』にも選んでいる。勅撰集は手にしやすかつたろうが、『御裳濯河歌合』も秋合朴氏の『平安朝歌合大成』によると、寛文ごろに板本が出ているらしく、したがって芭蕉が両書のうちどちらを見たかは分らない。

『千載和歌集』の詞書にあるとおり、西行は源平合戦の七年余、二見浦の安養山という所に草庵を